

靖国神社拜殿



マーシャル方面遺族会
 (旧クェゼリン方面戦没者慰族会)
 〒103 東京都中央区
 日本橋人形町1-8-2
 電話 03-3661-8760
 振替口座東京0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗丕

五十年祭と

関連行事の御案内

会長 佐藤宗丕

会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

恒例の慰霊祭を、今年は五十年祭として関連行事と共に盛大に行います。お知り合いの方々をお誘い合せ、お身内の皆様ともども賑々しく御参集下さい。

日 時 平成六年三月二十七日(日)

午前八時半集合 靖国神社参集所前
午前十時昇殿参拝

五十年祭 記念写真撮影の後、九段会館B1楼の間に移動(徒歩約二十分)

定期総会 正午より約二十分間の予定
議題 諸報告 会務計画 予算

直 会 総会終了直後より午後四時まで桜の間において、会食、懇談

協賛芸能 民謡 安藤民謡会 大正琴 千早会

◎現地慰霊巡拝(2頁を御覧下さい)
◎記念誌の刊行(3頁を御覧下さい)

◎参加申込みについて

本号に同封した私製はがきは、住所確認にもなりますので五十年祭に参加する、しないに拘らず二月二十日迄に到着するよう、御投函下さい。

◎五十年祭、直会、九段会館宿泊、現地慰霊巡拝の申込みは、はがきの所定欄にお書き下さい。

目次

五十年祭と関連行事の御案内	1
五十年祭現地慰霊巡拝の御案内	2
クロスビー・E.	
ヘーゼル司令官のお便り	3
五十年祭記念誌を刊行します	3
お尋ね	3
先の大戦は「侵略戦争」か?	4
靖 濤	4
日本遺族会首相に抗議声明	4
大東亜戦争は侵略戦争か	5
若林 繁雄	5
盤谷丸の轟沈	8
兼松 駿司	8
あの日から五十年クェゼリン島の戦友たち	9
井上 義夫	9
「ブラウン環礁の玉砕」を	
読んで	11
高田源次郎	11
呉海軍墓地合同追悼式に	
参列して	12
浦手 ハル	12
千鳥ヶ淵戦没者墓苑	
秋季慰霊祭	12
靖国神社秋季例大祭参行	13
靖国神社のみたままつり	14
みたままつり献灯について	14
ミレー抄(18)	14
成宮芳三郎	14
寄付者芳名	14
島の名 昔と今	15
環礁座談会の予告	15
名簿訂正	15
靖国神社奉賛会に入会を	16
五十年を顧みて	16
に御寄稿を	16
本部だより	16

◎九段会館に宿泊を希望される方は、料金を添えて二月二十日迄にお申込み下さい。料金は一室五人の相部屋で、一泊二食付一人八千円(特別割引)です。申込み後の取り消しや変更は直ちに左記に電話して下さい。

〒102 千代田区九段南一―六一五
九段会館 宿泊部

電話03―三二六一―五五二一
その時は念のため本会にも電話でお知らせ下さい。

◎九段会館で行う直会に参加を希望する方は、参加費として一人につき四千五百円を二月二十日迄にお振込み下さい。
会場の都合により、申込順に二百名を以て締切りますのでお早目にお申込み下さい。

◎今年他は他の参拝者も多く受付の付近が混雑しますので、年会費、寄付、直会参加費、九段会館宿泊料などは、郵便振替で二月二十日までに手続きをすませて下さい。

当日の受付は、参加の確認だけにしてほしいと思います。

◎午前九時に、現地慰霊参加希望者に旅行主催会社から旅行について説明があります。

◎環礁座談会(15頁参照)への参加希望は、はがきの余白又は欄外に記入して下さい。

五十年祭現地慰霊

巡拝の御案内

クエゼリン環礁駐屯軍ヘーゼル司令官から、次頁のような心温まる懇切なお便りを頂きましたので、当初の計画を変更して次の通り実施いたします。

本会は昭和42年4月から同年10月までの間、浮田前会長と佐竹現常任幹事

を現地に派遣して各島の調査、慰霊を行って以来10回に亘って延二〇〇名の会員、会友が現地を訪れ、他に厚生省や日本遺族会の主催する慰霊巡拝に大勢参加してきました。

本会会員の年齢構成から考えますと、本会の企画による大型現地慰霊巡拝は今回が最後かと思われず。

遺族、会友の皆様の参加申込みを心からお待ちいたします。

◎旅行主催会社は、東京都新宿区四谷二―十四―四ミツヤ四谷ビル
日本通運(株)東京旅行支店
電話03―三三五六―九三三一
に委嘱しました。

◎参加費用は、各班共一人約50万円の見込みです。各班の参加人員数により増減があります。10名以下のときは、相当増額又は取りやめになることもあります。

◎申込みは、住所、氏名、性別、生年月日、班別を明記して、4月末日迄に本部にお申込み下さい。

本会より主催会社に取り次ぎ、爾後の連絡やお世話はすべて主催会社の責任で処理します。

◎年齢に制限はありませんが、この旅行に耐え得る旨の医師の証明書を添付して下さい。高齢者には付添いをつけて頂きます。

◎8月5日の、1班と2班の宿泊地エバイ島は、旧エビゼ島です。クエゼリン島の北北東約3kmの小島で、第九五二海軍航空隊員と第四施設部派遣員の合計約八百名が玉碎されました。

現地慰霊巡拝参加希望者

(五年十二月十日現在)

クエゼリン

佐藤 宗丕 佐藤 ナヲ 会田 くに

佐藤 隆一 佐藤 章子 田中 菊枝

山田 正三 山田キヨエ 浜田 芳枝

現地慰霊巡拝日程表 <6.8.2(火)―9(火)8日間>

日数	月日	曜	1・2班	3班	4班
1	8.2	火	07:30 靖国神社集合	11:55 成田発	<グァム泊>
2	8.3	水	08:15 グァム発	18:45 マジュロ着	<マジュロ泊>
3	8.4	木	島内巡り 合同追悼式	日系人と懇談	<マジュロ泊>
4	8.5	金	クエゼリン慰霊	マロエラップ慰霊	タラワ慰霊
			ロイナムル慰霊	ウオッゼ慰霊	
			ブラウン慰霊		
			<エバイ泊>	<マジュロ泊>	<タラワ泊>
5	8.6	土	各班マジュロ集結		
			19:20 マジュロ発		
			…………日付変更線通過…………		
			00:50 ホノルル着	<ホノルル泊>	
6	8.7	日	日・米戦歿者追悼	市内観光	<ホノルル泊>
7	8.8	月	13:15 ホノルル発		
			…………日付変更線通過…………		
8	8.9	火	17:10 成田着解散		

※ 上記日程は航空会社のスケジュールの都合により変更になる場合があります。

川本 彦次 川本 玲子 植田 敏裕
 植田 秋子 浦手 清司 浦手 満子
 奥井 礼子 石川 正興 大城 誠徳
 大石 明 小島 温 計二十名
 ルオット
 松本 孝子 菊地 彦亘 黒川 誠
 黒川 直吉 佐竹 エス 鈴木つな子
 山森 久江 山森 美穂 山森 清一
 岩田とし子 藤田 正勝 内山 浅子
 計十二名

富田 ミツ 富田 キミ 荒木 常子
 片岡 良子 中村 順子 中村 秀夫
 上田 文子 吉田 正次 坂下 綾子
 計九名
 マロエラップ
 山内 キク 山内 正隆 計二名
 ウオツゼ
 斉藤耕太郎 篠崎 英夫 赤坂 スズ
 計三名
 マキン・タラワ
 佐藤 敬義 樫田志津代 計二名

クロスビー・E・ヘーゼル

司令官よりのお便り

一九九三年十月八日
 マーシャル方面遺族会
 会長 佐藤宗不殿

親愛なる佐藤様
 一九九四年八月、遺族会のメンバー
 による、アメリカ軍クワジエリン環礁
 基地 (USAKA) 訪問の折り、クワ
 ジエリンに一晚滞在したいという由の
 お手紙を受け取りました。
 基地内に泊まっていただけでは幸い
 ですが、我々の限られた基地には軍の
 任務に関係した公式訪問者しか、お泊
 め出来ない規則になっているのです。
 貴方の方で「どこか近隣に宿泊でき
 るところ」という代替のプランをお持ち
 ちのようなので、この島の近くで貴方
 のグループが宿泊できる場所を、いろ

いろ当たってみました。

Ebeye (ハイ) 島の Anrohasa
 (アンロハサ) ホテルは、清潔で泊り
 客を温かくもてなしてくれま。一泊
 85\$ から 95\$ までの部屋があり、四十
 人まで快適に宿泊できます。
 もし貴方がたが、ハイに宿泊する
 ことに決められたら、必要な準備に関
 しては、公務担当の将校に貴方がたの
 お手伝をするように申しつけておき
 ます。クワジエリン・ハイ間のフェ
 リーボートは、無料でお出しします。
 ロイ・ナムルへの訪問を希望される
 メンバーがおられる場合は、我々の最
 新式マルチ・エンジン航空機のひと
 つ、Armydash7 でそこまでお連れ
 することができるとい。往復の料
 金は、ほんのわずかで結構です。
 USAKA の食堂も使っていました
 ます。クワジエリンのパンフィック・
 ダイニングルームとロイ・ナムルの食

堂は、値段も手ごろで、安心して食べ
 ていただけますし、とてもおいしいで
 す。
 もし一九九四年八月上旬に、クワジ
 エリンを訪問する予定でしたら、皆様
 方とお会いすることが出来るでしよ
 う。
 しかし八月十二日になりますと、私
 の USAKA 司令官としての任務が終
 りを迎えます。その日、司令官交替式
 が執り行われ、David Spaulding 大
 佐が私の後任となり、私は次の任地に
 向かいます。
 貴方がたの訪問日は、ちょうど US
 AKA の「レンジ・ダウンタイム」に
 (環礁内での任務遂行がない時期) に
 あたりま。今のところ、それは一九
 九四年七月十七日から八月二十七日ま
 での期間の予定です。この基地解放期
 間のことを念頭において、当地訪問の
 計画をお立て下さい。

私はまだ貴方がた遺族会のメンバー
 を歓迎する榮譽に浴していませんが、
 今までの貴会の当地訪問に関する資料
 を読み、心を動かされるものを感じて
 います。
 以前クワジエリンを訪問されたとき
 と同様、USAKA・ホスト ネイン
 ヨン リエゾン オフィスのスタッフ
 が、貴方がたの滞在中、いろいろお手
 伝いをしようと心待ちしています。貴
 会の五十周年記念、クワジエリン、ロ
 イ・ナムル島慰霊巡拝が、皆様の心に

残るような特別な旅になるように、あ
 らゆる面での協力を惜しみません。
 もしまた何か、貴方がたの為に手
 伝いできることがありましたら、遠慮
 なさらずにいつでもお申し出下さい。
 敬 具
 アメリカ合衆国陸軍大佐司令官
 クロスビー・E・ヘーゼル

五十年祭記念誌を刊行します

五十年祭記念行事の一環として概ね
 次の要領により記念誌を刊行します。

- 一、内容
 大東亜戦争および戦後の事柄で本
 会に直接又は間接に関係ある記録
 二、写真はカラーとモノクロ計約百点
 三、B5版 約72頁 クロス張上製本
 四、平成6年分を含む会費3ケ年以上
 完納の会員、会友に一部を無料で進
 呈します。
 五、希望者には一部送料共五千元で予
 約を受付けます。2月20日迄に郵便
 振替で御送金下さい。
 六、完成は平成7年1月末の予定です

お尋ね

ウオツゼで戦死された米倉治雄様と
 同年の方で、吉田操様の住所を探して
 おられる方に申し上げます。
 貴方の住所氏名を至急本部にお知ら
 せ下さい。

先の大戦は「侵略戦争」か？

昨年八月十日に細川首相は「先の大戦は侵略戦争であった。間違つた戦争であつたと認識している」と発言した。

細川首相は、国難に身を挺して散華された二百余万柱の英霊を、侵略戦争に荷担し、狩り出されて犬死した憐れな犠牲者とも思っているのではし

か。

心ある日本人ならば、特に遺族たちは、正に、五臓六腑の煮えくりかえる思いです。私どもと同じ思いの方々の主張と行動を紹介いたします。

賛否の御所見を本部にお寄せ頂けましたら幸せです。

四十八回目の終戦記念日、靖国神社の御社頭は、終日参拝者の人波が途絶えることはなかった。

しかし今年も総理の参拝は行われなかった。それどころか就任後の記者会見で細川総理の「先の戦争は間違つた戦争であり、侵略戦争だった」と断定した発言に、驚きと耐え難い思いを抱いたのは筆者だけではない。更に「侵略戦争」と断じておきながら、「全国戦没者追悼式」に参列し、総理の言う「侵略を行ったとする戦没者」への追悼とは、如何なる整合性があるのか。

敗戦後、一般の日本人はGHQの喧伝により民族的自尊心を失い、卑屈さと劣等感に陥つたことは否定出来ないが、不当なる劣等感や誤つた罪悪感を抱くことは明らかに行き過ぎと言わね

ばならない。こうした戦後の日本人の精神的構造に多大な影響を及ぼしたのが、紛れもなく東京裁判史観であり、

占領政策であつた。何より敗戦による惨めな生活という現実が「日本が悪いから負けたのだ」という短絡的思考を助長し、殆どの国民が、連合国による不当な裁きを已むなく受け入れてしまつた。特に教育の面では、東京裁判史観が色濃く反映され、自虐的歴史観が浸透していったのである。今回の総理の発言は、こうしたことに決して無関係ではない。

しかし、大東亜戦争の歴史的検証が続けられ、評価が未だ定まっていな現在に於いて、斯かる総理の無配慮な発言は、断じて容認出来ない。ばかりか、只管純粋に、愛する祖国と家族を想い散華された英霊に対する重大な侮辱である。今、総理が為すべきは、偏狹で歪んだ歴史観に基づき謝罪や反省

ではなく、東京裁判史観という病根を除去し、健全なる国家的意識を回復することであらう。

今日まで、肉親の戦死は国家と国民のためであつたと確く信じ、心の支えとしてこられた御遺族の心情や、祖国存亡の危機に勇躍立ちあがった戦友の方々の悔しさ、そして何よりも、死してなお鞭打たれる英霊の無念さたるや如何ばかりであらうか。

(注)靖国神社報「靖国」第四五八号より転載

日本遺族会

首相に抗議声明

細川首相の「侵略戦争」発言に対する戦没者遺族はじめ、心ある多くの国民の怒りや非難の声が日増しに強くなって来ている。日本遺族会は十月一日、常務理事会を開催して、この「侵略戦争」発言に対する抗議声明をまとめ、後記の声明文を細川首相に直接手交し、今臨時国会で「侵略戦争」発言を撤回することを要求する等の抗議行動を実施することを決めた。

(5・10・15日本遺族通信)

声 明

細川総理は去る八月十日の記者会見において「さきの大戦は侵略戦争であつた。間違つた戦争であつた」と断言した。

顧みるに大東亜戦争の様相は、その

戦場となつた中国、東南アジアの諸地域の特性、また、終戦時のソ連不法進軍などそれぞれの経過、評価を異にするものがある。それを総て「侵略」と断定するところに歴史の認識に欠けるところがあり、言外に「戦没者を侵略者に荷担した犠牲者である」と決めつけた英霊冒とくのこの発言は一国の総理として他国に類を見ない極めて軽率な言辞であり、その見識を疑わざるを得ない。

戦没者遺族は今日までわが身をかえりみることなく一途に祖国の安泰と繁栄を願つて、尊い生命を国家に捧げた肉親に誇りをもって、茨の道をひたすら生きてきた。しかるに総理のこの暴言は、この心の支えを根底から踏みこたしたものであり、われわれ戦没者遺族は、断じてこれを容認することはできない。

大東亜戦争は国家、国民の生命と財産を護るための自衛戦争であつた。東京裁判を執行したマッカーサー元帥でさえ、ウエーキ島でのトルーマン大統領との会談(一九五〇年十月十五日)で「東京裁判は誤りであつた」と語り、さらには米上院(一九五一年五月三日)で「日本が第二次大戦に赴いた目的は、そのほとんどが安全保障(自衛)のためであつた」と表明している。細川総理は、この歴史的事実を承知しているのであらうか。

また、イギリス、フランス、アメリカ

カなど欧米列強の国々がアジア、アフリカ等の諸国を植民地化していた時代があったが、これらの国々が謝罪したことは一国としてない。

しかるに、細川連立内閣は戦争責任の反省と謝罪のための国会決議の愚挙を行おうとしている。

われわれ戦没者遺族は細川総理の東

大東亜戦争は侵略戦争か

——遙かなる護国の英霊に代わりて——

若林 繁雄

(海交会全国連合会会長)

京裁判史観に毒された自虐的侵略発言に対して猛省を求めるとともに、侵略、さらに国会決議発言を今臨時国会の場において撤回することを表明するよう、ここに断固要求する。

右声明する。

平成五年十月一日

財団法人 日本遺族会

はじめに

細川首相は就任直後の記者会見で、「私自身は、先の戦争は『侵略戦争』であった。間違った戦争であったと認識している」と発言し、また国会の所信表明演説でも「過去の我が国の行為は、『侵略行為』であった」として、近隣諸国にお詫びをし、謝罪している。また羽田副総理兼外相も「国会決議で日本の戦争責任を明確にすべきである」と言っているから、この一連の「侵略—謝罪—戦争責任」の言明は、連立政権の一貫した政治姿勢である。

しかし、考えてみるがよい。二五〇万人の戦没者をもとより、死闘の果てに生き残った我々も「自存自衛」のための戦争と信じればこそ、恩愛を越え大命の下、万里の外に戦ったのであり、決して侵略のために戦場に赴いたわけ

ではない。これはすべての戦争犠牲者と国民に対するいわれなき冒瀆であり、またそれゆえに不見識であり、軽率でもある。首相は別の答弁で、個人の認識を示したものとかがごとくであるが、一国の外交権を有する内閣の首長たる代表者が公の場における明言である以上、逃げ口上は許されまい。

政権の責任者としては言って善いことと悪いことがある。一体何のために、半世紀も経った今、すでに国際条約で決着のついている問題を掘り起こし、寝た子を起こす愚を犯そうとするのか、理解に苦しむものである。

「侵略—謝罪—戦争責任」とくれば、文脈上おのずと補償責任の問題を生じる。現に、報道によれば、政府のこの言明を契機とし、あるいはこれを

根拠として、かつての交戦国の一部国民の中に、日本に戦争責任の補償を要求せんとする動きが醸成されつつあるとのことであるが、この場合、我が国の国益はどうなるのかを聞きたい。戦禍の中から立ち上がった今日の日本の発展は、尊い戦没者の屍のうえに、国民の営々たる努力により築かれたものであることを忘れてはならない。

正義は国の数だけあると言われるが、一国の最高責任者が、自分の国を自ら「侵略国」呼ばわりをし、自国を苛んだ例は寡聞にして知らない。「侵略」というからには、その前提として動かしがたい明確な歴史上および国際法上の与件を示す必要がある。これなくして単に「コマの主観的・情情的な出来事の実認認識を示しても、赴くところ終局の被害者は国民なのである。のみならず「外交、防衛、エネルギー等重要基本政策は、従来の方針を踏襲する」というのが、連立政権成立の前提条件であった筈であり、国民との公約なのである。

しかるに、何故、新政権は、従来政府が外交上・教育上その他万般の配慮から、慎重に対処してきた問題を、何らの国民的論議を経ることもなく、唐突に変更し、近隣諸国との間に、新たな紛争と緊張を生ずる恐れのある「侵略」を自ら確認し「戦争責任」を創り出そうとするのか。何よりも政府の義務は、外に対しては国益を守り、内に

対しては国民の幸福と人権を守ること

を第一の使命とすべきものである。

そうであればこそ、憲法にも政府・

内閣の権限として「従って義務とし

て、①法律や条約を誠実に執行すべき

こと。②過去、現在及び将来の国民に

対する人権は、国政上最大の尊重を必

要とする旨が定められているのであ

る。この意味からも、政府の「侵略戦

争—戦争責任論」は、すでに確立され

た国際条約(サンフランシスコ講和条

約、日中平和条約、日ソ共同宣言、日

韓基本条約等)を慮外にし、日本の国

益を骨抜きにするに等しいのである。

守るべきは戦没者や

戦士の名誉と人権

あまつさえ、それは戦没者の名譽と

魂への冒瀆であり、遺族の痛恨の心情

に対する国家による無慈悲な背徳であ

る。これは取りも直さず、人間の高貴

な精神—純一無雑な犠牲的精神や国家

に対する忠誠心—に加えられた、故な

き侮辱であり、苦痛であり、それゆえ

に人権の侵害である。死者にも遺族に

も、この意義における天与の人権があ

ることを忘れてはならない。

そしてまた、祖国と運命を共にせん

と、国家の危急に馳せ参じた数百万兵

士に対する心なき裏切りと言わざるを

得ない。政府は、五十年経った今も、

老いの身に弾丸を宿し、四肢を失いし

不自由に、日夜呻吟する隠れた戦士の

いることに思いを致したことがある

か。また、草の根を食み、疫病と闘い地の果て、海の波間、玉砕の島から、九死に一生を得て生還した兵士の声なき声を聞いたことがあるか。我々にとって、この十五年戦争は何であったか、それは「青春の墓標か、生ける屍か」もし、政府が、外に對し「侵略戦争」の「贖罪」をするというのであれば、先ずもって、これらの人々と神明に跪き、神意の許しと国民的合意を得てからにすべきものである。内なる戦後処理は、いまなお終わっていないことを知るべきである。内閣の責務として、靖国神社に公式参拝もしない、またできない政府に、これに言及する資格はないのである。

一体国家の「良心」とは何か、真の「道義」とは何か、世界いずくの国においても、国難に殉じた戦士の墓標・靈廟は、国家・民族の象徴として、常に最高の名譽と敬意をもって、永久に護持されているのである。けだし当然のことである。「百年兵を養うは一日のため」と言われるが、命を懸けた戦士の「名譽を軽んじ」、「後顧の憂い(悔い)」を残しては、百年の計は成り立たない。我々は決して国民の尊い血の犠牲によってあがなわれた、この魂の「原点」を風化させてはならないのである。それは「国家の恥辱」であり、「自己否定」である。国を愛するの心を養うは政府の責務であり、「背骨なき国家」は世界の侮辱を受けるこ

とを知るべきである。

思うに、国家・民族は永遠のものたたくべく、政府の国民に對する約束もまたかくのごとく不変のものでなければならぬ。我々はかつては「聖戦」という大義のため死地に赴き、今や一転して時の政權によって、事もなげに、あれは「侵略」であったとされるのか。それは国家による「欺瞞」である。政權は一朝にして崩壊するが、歴史は連続するのである。我々が真に信ずべきものは何か、それは「無念」か「慟哭」か。首相のいう「質実国家」とは果たして何か、「責任ある変革」とはかくのごときか。これは「歴史観」というよりは、「国家の責務と在り方・国是」の問題なのである。政府がたとえ「侵略戦争」の名を借りて過去を清算してみても、それによって、日本の「平和と安全」が保障され、世界から戦争が放逐され、新しい平和の秩序が到来するわけではない。我々は幾度か死線を越え、身命を賭して戦った者の、自らの誇りと、伝統ある国家・民族の名譽にかけて、断じて、あの戦争に「侵略戦争」の「烙印」を押すことを認めるわけには行かないのである。政府はすべからず不易の「経綸」を行うべきものである。

日本は果たして侵略国か

我々がゆめ間違つてならないのは、日本は有史以来、地政学的に東北アジアの一角に位置する四面海に囲まれた

鎖国小国であったことである。いかなる意味でもアジア太平洋地域において「植民地主義・帝國主義」に先鞭をつけ、他国に魁(さきがけ)たことはないのである。仮に「侵略」を言うのであれば、それは先ず、英・米・仏・露・蘭である。これらの国々が一度たりと謝罪したことがあるか。日本は紛れもなく植民地主義・帝國主義の後進国であった。歴史の流れには素因と結果がある。戦争に負けたからと言って、これを入れ替えることはできないのである。

日本が中国大陸に進出したのも、元はと言えば、東亜における先進帝國主義国家群との権益のせめぎ合いや確執に端を発し、あるいはその従属からの脱却にあったのである。当時の中国の政情不安―国内不統一内戦等の中にあって、錯綜する列強の干渉や利害に伍し、日清・日露の戦争以来、条約により、正当に約束され、保証されていた日本の生命線としての権益を守ることにあったのであり、他国の主權を排し、領土を侵奪することを目的としたものではなかったのである。このことは、開戦前の日米交渉―いわゆるハル・ノートに経過を徴しても明らかであり、正に「自存自衛」のためであったのである。

また、東南アジアへの進出も、その延長線上にあったものというべく、アメリカの対日石油供給停止を始めとし

た、いわゆるA・B・C・Dラインからの防衛にあったのであって、決して東南アジアそのものの侵略を目的としたものではなかったのである。総じて日本のとった行動は、当時の世界の国々が直面していた、食うか食われるかの、正に帝國主義・植民地主義全盛の時代における止むを得ざるにいたる「自衛」のための戦争であったのである。

共産主義の防波堤

また、これに加えて、共産主義の台頭以来、世界各地に侵出する陰險かつ執拗な社会帝國主義の覇權から、日本およびアジアの安全を守ろうとする「防衛戦争」の意義と性格をもつものであったことも、つとに歴史の教えるところである。このことは過去七十年間のうちに、ユーラシア大陸に生じた多くの国境線の変更や、国家の離合集散の様相、およびソビエト連邦の崩壊に至る原因と経過をたどればおのずと明らかである。

思えば日本は、敗戦を余儀なくされたとはいえ、戦前戦後を通じ、この半世紀以上もの間、一貫してアジアにおける「共産主義の防波堤」として、また「防共の砦」として名譽ある地位と役割を果たしてきたのであり、ソ連崩壊後の今日を思えば、むしろ、今や日本こそ、平和の貢献者として称賛されるべきなのである。アジア太平洋地域における白色人種の覇權からの解放、

有色民族の自主独立についてもまた同様である。排すべきは歴史の偏見なのである。

過去、幾多の試練に耐え、先人の努力と苦難の歴史の積み重ねによって得られた、現時点における平和の論理や尺度をもって、全く枠組の異なる五〇年・一〇〇年前の事実を一方的に「侵略」と規定し、断定し、これを自国の責めのみに戻してみても、それは所詮歴史の「イフ(もしも)」を言うに等しく「偽善」というほかはない。学者・評論家ならいざ知らず、主権国家の政府の意思表示としては、国家・国民に対する許し難い「背信」であり、「自傷行為」と言わざるを得ない。国民はマゾヒストではないのである。「論言は汗の如し」とか「社稷(ししゃく)の臣」たらんとせば、まずもって国民の負託に応え、国家の安危を担うべく、国際政治の現実を厳しいことを肝に銘ずべきである。

戦争責任は交戦国双方の責任

さらにまた、政府が、近隣諸国を戦場として使い、民衆に有形無形の苦痛を与え、迷惑をかけたことを反省すると言うにしても、だからと言って、それが直ちに「侵略」に当るわけではなく、また「侵略」を目的としたものではないのである。それは善悪を越えて、主権国家のぶつかり合う存亡をかけての戦争の現実であり、交戦国双方の責めに帰すべきものであって、そ

のことが「侵略」になるわけではないのである。また、たとえ戦略なき無謀な戦争に追い込まれ、戦端を開き、ついに敗戦の憂き目をみたというにしても、それ故、それが「侵略」となるわけでもない。「内なる戦争責任」と「外なる戦争責任」は峻別すべきものである。

ドイツのような意図的・計画的なユダヤ人の大量虐殺とか、アメリカの原子爆弾や無差別爆撃による、無辜の非戦闘員の大量殺戮とか、あるいはソ連の戦争終結後における五十万余の俘虜の強制連行・重労働・拘禁下の思想洗脳・虐待・致死・北方領土の侵奪などとは全く訳が違うのである。それこそ正しく国際条約に反する「人道の罪」であり「戦争犯罪」なのである。政府は、何故、これを不問に付し、歴史から抹殺しようとするのか。片手落ちは厳に排すべく、何人も歴史の真実を歪める罪悪に加担することはできないのである。

東京裁判は人道に反し、国際法違反
 思えば、連合軍総司令部の命令による「極東軍事裁判」こそ、「文明の名」を騙って行われた、勝者による「復讐」と「背理」の裁判であり、二十世紀の歴史の「欺瞞」であり「汚辱」である。正に「人類の悔恨」というべきなのである。これは、紛れもなく軍事占領下の権力による不条理な「圧迫」と「隸従」の強制であり、裁判に名を

借りた「理不尽な処刑」は、国際法に反する「残虐行為・人権侵害」そのものなのである。正に非戦闘状態における隠された負の「平和の罪」「人道の罪」というべく、人権は天賦のものな故にそれ自体が犯罪なのである。何人も、たとえ国際法によっても、実行の時に、犯罪を構成しなかった事実について、有罪とされることはないのである。それは何時の日か、後世の歴史によって断罪されるであろうものである。

我々は、彼のマッカーサー元帥が、その後、時を経て、公式の場で、いみじくも「あの東京裁判は間違いであり、太平洋戦争は日本にとって『自国防衛』自衛」のための戦争であった」と、証言していることを想起すべきである。我々は「歴史の評価」や「国際正義」の現実とは、かくのごときものであることを知るべきなのである。いまだ政府の手によって、それがなぐさめ、何かの手段として、二十世紀の「戦争と平和」を総括すべき時期では決してないのである。我々は、永い歴史の試練を経て、「神の裁く法廷」が到来するまで、我らと我らの子孫のために、自らの祖国を「侵略国」と断罪する必要は全くないのである。それは国家の本質―歴史の真実に悖るからである。

むすび

さて最後に、戦争を知らない世代の

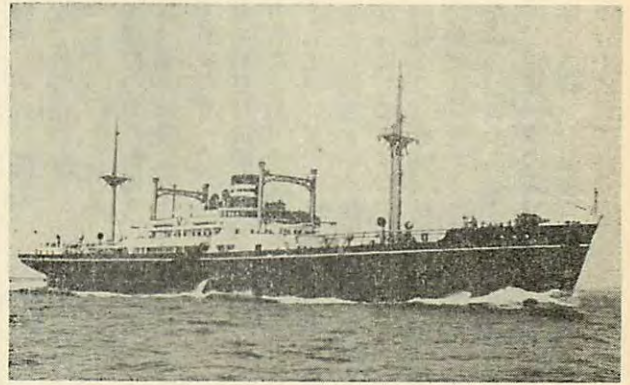
細川首相が反省と悔恨を込めて、心情的に、道義的に、あの戦争は「間違った戦争」であったというにしても、あの時の―最高戦争指導者の一人であった―祖父、近衛文麿公を含めて―「どのが、なぜ、どのように、間違っていたのか、そしてどうすれば間違わなかったのか」を示さなければならぬ。これを欠いたままで「間違い」を言うのは、「木によって魚を求め」るの類というべく、「時」は、人々に過去の教訓を与えこそすれ、未来を教えてはくれないのである。我々があの戦争から学んだ多くの教訓と悔悟をもってしても、だからと言って、それが首相の言う「間違った戦争―即ち侵略戦争―侵略国」という図式にはならないのである。

政府がこの期に及んで「侵略戦争」を内外に宣明することは、以上、憲法、条約、歴史、国民感情、教育、利益等のあらゆる観点からみて、政治的・外交的に、そしてまた論理的・倫理的に、自家撞着、整合性を欠くも甚だしいのであり、国家・国益の論理にはほど遠く、「百害あって一利なし」と言わざるを得ないものである。

魂のために― (合掌)

(平成五・九・五・記)

(注) 海交会は旧海軍出身者の全国組織で、戦死者の慰霊と会員の親睦をはかっています。



輸送船「盤谷丸」の轟沈

南海第一守備隊 兼 松 駿 司

輸送船盤谷丸(特設巡洋艦)は乗組員 11 海軍一二〇名、陸軍南海第一守備隊長以下八〇〇名(本部および歩兵四個中隊編成、砲兵一個中隊は満洲から帰還、宇品で合流)、積載物 11 トラック一八輛、隊長車一輛、一〇 糧砲四門、砲弾一會戰分、糧秣、甘味料その他半年分、歩兵彈薬一會戰分、医薬品は野戦病院二か所開設分を満腹に搭載し、嚴重な潜水艦の魚雷攻撃警戒と

だるような暑さを克服しながら一八日目にトラック島に入港した。

命令「南海第一守備隊ハ、マーシヤル群島ジャポール港ニ於イテ三日間日ヲ待ッテ出港スベシ」。(注・當時タラ

当時はトラック島は連合艦隊の基地で、戦艦大和、武蔵の堂々たる勇姿を見て心強さを感じたが、その反面、敵の魚雷攻撃でやられた輸送船数隻が赤腹を出し傾斜した哀れな姿を見て、内地で発表の戦況とは大変な違いで、いよいよ厳しくなっていることを痛感した。私たちは夏島に上陸、入浴してタロ芋を間食に配給され、久しぶりに人間らしくなった。夏島には大阪刑務所の囚人が飛行場作りをやっていた。また、この基地は航空機の中継基地でもあった。その日再乗船、駆逐艦「雷」に守られ一路ギルバート諸島タラワ島に向かつて航海の途についていた。

一九日の夜は南方には珍しく海が荒れ、兵隊は船酔いがひどく、翌二〇日

は殆ど船倉で就床している者が多くあったと思われる。

二〇日一、〇〇(昭和一八年五月二〇日午前一時)大本営命令を受けた。(無線暗号)

輸送船は進路をヤルト島に向けた。赤道へ五度に達したので、兵は防暑服に着替えさせ、ビール、甘味品を配給の最中、午後一時五分、突然ものすごい轟音とともに船尾に魚雷が命中、二発目は弾薬庫に命中、三発目は機関部に命中、船尾を下に船首を上に向け突立ったまま海中に姿が消えた。

私はヤルト島が近くなり、甲板上一部の兵のさわがしい声に、ふと船室を出て甲板通路に出た瞬間、足を取られて横転、略帽を拾ひひまもなく「回避!」を叫びつつ四五度に傾いた船の赤腹を伝い、海中に飛び込み、夢中で泳ぎ、積んであった漂流物によりやく泳ぎ着くことができた。

駆逐艦「雷」は敵潜水艦攻撃の爆雷を海中に投下、その爆雷の海中での爆発音が、ズシン、ズシンと気味悪く浮いている身体に響いてくる。負傷に耐

えかね、氣力を失い、次々と海中に沈む兵隊を助けたいと思っても、波が高くてどうにもならない。

そのうちヤルト基地から救助船が到着した。助けを呼ぶ声、救助船が近づき、救助されると思うと、波が高く救助船は離れて行く。二時間も過ぎたと思うような長い時間だった。眠らないように姓名を呼び合って元氣をつける。

誰かが歌いはじめた。「海ゆかば」「暁に祈る」である。海上に流れた声

がだんだん大きくなり大合唱となった。泣けた泣けた。無性に涙が出てきた。歌っているうちに今まで広い海に一人ぼっちであるという底知れぬ不安感、心細さ淋しさが消えて、俺は一人ぼっちではない、これだけの兵がいるんだ! どうしても生き抜かねばと元氣を出して待った。

やがて数時間後、荒れていた海も静かになり、全員(海上に浮いていた者)救助された時は、既に大きな月が昼のように明るくきれいであった。

救助船が基地に到着したのは一時間後、私は八〇二航空隊、他の生存者は六二警備隊に収容され、お粥を夕食にいただいて、ようやく心が落ち着き、生きていたという実感が湧いてきた。

その時のお粥の美味しさは忘れることができない。

翌二一日、初めて見るヤルト島は小さな島の基地で、椰子の木が茂り、

...

船名 盤谷丸(貨客船)
建造者 大阪商船(大阪商船三井船舶)
建造所 三菱造船所
竣工 昭和十二年九月二十日
要目 五三四八総屯、長さ一一三米
高速ディーゼル機関装備
速度 12/16 節
就航 横浜―バンコク間急航便として
軍歴 16 年 8 月・海軍に徴用され特設巡洋艦として戦地勤務中
19 年 5 月 20 日ヤルト島近海で米潜の魚雷攻撃により沈没
殉難船員 六名

島の中央に八〇二空の本部、兵舎、飛行艇の格納庫、六二警備隊本部、兵舎があり、島は中央部の幅五〇〇米、長さ二〇〇〇米、その中に発電所等があり一見平和な島のようにみえた。

取りあえず生存者の確認の結果三〇〇名であった。守備隊長藤野中佐以下五〇〇名の戦友が盤谷丸と運命を共にした悲しい一瞬の出来事であった。私の中隊は小隊長少尉三名、見習士官一名、准尉一名以下多くの下士官、兵を失い、その時のショックを思い出すと悲しく、遺族の心中を察すると申し訳なく、心の静まるにつれ暗い気持ちになつた。

あの日から五十年

クエゼリン島の戦友たち

戦友の忌の

また巡りきぬ梅の花

二月六日がまたやってくる。昭和十九年二月六日、マーンシャル群島クエゼリン環礁の陸海軍守備隊六千五百余人が玉砕した無念の日である。私は敵の上陸する以前に、幸か不幸か病を得て内地送還となり死を免れた。そして今ここに生きている。あれから五十年の歳月が過ぎようとしている。

思い出は昨日のようによみがえる。

私が先任であるため取り急ぎ守備隊長代理として大本営へ報告の電報を打ち、爾後の命令を待った。服装を海軍部隊から借り、兵器は無く丸腰の集まり、中には沈没時のショックで狂気の兵が出るなど、支離滅裂の状態であったので、兵の健康管理と精神教育に専念した。

一か月後になって、ようやくフィリピン方面軍から軍服、兵器、弾薬等が送られてきてどうやら陸軍部隊らしくなつたものの、装備はすべて旧式のものであった。

(ヤルト戦友会編「ヤルト戦記」より転載)

会友 佐世保 井上 義夫

昭和十六年彼地に進出した時は、まだヤシの葉繁る平和の島であった。への字型をした長さ四キロ、幅六百mの小さなサンゴ礁の島にはカナカ族の現地人もいて尻振りダンスで度々慰問してくれた。

隣りの島に招かれ、現地人の小学校で日本人教師の指導による「日の丸部隊長」を歌ってくれた時はびびりした。夕方裏海岸に行つて糸を投げる、ヒラアジが面白い程釣れた。蒼す

ぎて区別できない空と海、けがれのないう潮の香り。ヤシの実の汁は最高級の清涼飲料、存分に吸った。あの味は今でも忘れない。

しかし湿度の高いのには悩まされた。隊舎の床を高くして畳の湿りを防いでいたが釣っているカヤが翌朝しつとりと濡れている。ために呼吸器に悪く、また、水虫がはびこった。 Deng 熱にかかり四十度の発熱と激しい下痢、いち度に多くの隊員がやられ、病室からはみ出してヤシの木陰に仮設ベッドで寝かされたことも。飲料水にも困った。水道や井戸など思いもよらず、すべて「水は天からもらい水」各隊舎に雨どいをかけて集め濾して使った。

大東亜戦争開戦の日(昭和十六年二月八日)を迎えた時は覚悟していたものの、身の緊張を覚えた。昨日までの南の楽園が急転直下一挙に対敵最前線となつたのだ。案の定、早速招かざる客、敵機動部隊の来襲。ひどかつたのは十七年二月一日まだ寝しずまつている早朝、突如空襲警報、我が隊舎と司令部庁舎に大型爆撃弾命中中、全てが吹き飛び八代司令官、法元首席参謀即死、隊員死傷者多数。港内に碇泊中の艦船も被害甚大。私は辛うじて難をのがれた。

クエゼリンのすぐ北の米軍領「ウェーキ島」を昨年十二月二十三日、我が海軍部隊が上陸激戦の末これを占拠

したが我が方も駆逐艦二隻を失った。

私はちらり死を覚悟した。夜、裏海岸に出てヤシの葉陰から洩れる淡い月光を仰いで遙か四キロを隔てた日本の、天草の方向に向つて「父母よ有難う、二十歳の今日までよく育ててくれました。長男のヨシオは運命のまにまに、このさいはての島で果てるかもです。再び天草の地を踏むことはないでしょう。孝足らずをお許し下さい。あとに弟が五人います。どうかお達者で、弟たちよ両親を頼むぞ」と祈ったことを覚えてる。時局だ、戦争だ、独身だ、泣く人もおるまい、でも母は泣くだろうなあ。ご免よ母さん。

正月には真っ裸で餅つき、暑い暑い汗だくで、何しろ赤道付近、常夏である。女気の全くない島、ときたま内地から船が入り、内海へ投錨。甲板にいる女性を一目、見んものと波止場で双眼鏡の奪い合い。先輩が先で若い私どもは一番あとで短時間しか見られない。

調理には一番関心を払つた。久方ぶりにほるぼる内地からきた糧食船の生野菜も陸揚げした時はもう相当いかにある。肉缶と乾燥野菜、ヒジキの煮込みが多かつた。あとから生野菜の現地栽培に着目、キューリ、ナスが見事に垂れ下り、内地顔負けにできて助かつた。切り倒したヤシの木の芽を炊くとタケノコに似ておいしかった。いつか一mもある海亀が海岸に這い上つた

のを生け捕り、料理して「久し振りに今日のは内地からきた生の牛肉だ」と善意のたましで配食したら「ほんた」と喜んでくれたこともあった。何の褒めもない男ばかりの孤島のこと、土気の根源なので給食に主計科は心を使っていたのである。

南方特有のスコールは格別だった。たちまち一天俄にかき曇り大粒の豪雨、そしてさつとあがる。このスコールのあとの何とさわやかで気持のよいこと、内地では味わえない。

はるばる内地からきた慰問袋をもらって紐を解く時の何と嬉しかったことよ。まさに幼稚園児の遠足の朝と同じであった。内地の匂いとニュースに飢えていたのである。ともすれば荒む気持を和ませるための隊員自作自演の慰安演芸会も度々。入隊応召前の職業はさまざま、役者おり、大工おり、歌手おり、画家おりで何でもできた。餅をまいての「お岩の幽霊」の芝居は、本場そっくりのでき、おかげで当分夜の外便所が気味悪かった。

しかしこの殺風景な最前線の基地も上は司令官から、下は兵にいたるまで一致団結、同じ釜の飯を食って和気あいあいのうちに結構楽しく任務を完遂していた。緒戦は勝ち戦さであったが、十七年、十八年と戦局は逐次我不利となり、私も仕事が増加、事務室は夜は四方に黒幕を張って灯火管制、ますます通風を悪くし、残業徹夜も度々、加えて食事の不完全、生来ひ弱だった私は、これ等が重なって遂に肋膜炎との診断。不本意ながら内地送還の憂き目となり兄弟同様の皆と泣いて別れた。許せ戦友たちよ。

予期しない悲運が襲った。司令部のあるこのクェゼリン島とルオット島は敵のねらうところとなり十九年一月三十一日より大規模な敵の空爆と艦からの徹底的な砲撃の末、我に数倍する海兵隊の上陸を許し、彼我の熾烈なる陸上戦闘数日間、敵に多大の損害を与えつつも遂に二月六日最後の突撃を敢行、或は自決し通信途絶、ここに全てが終焉したのである。

両島陸海軍守備隊の軍人軍属、司令官秋山海軍少将以下六千五百余人が無念の玉砕を遂げる。痛恨の極みである。私はこの悲報を病癒えた次の勤務地の上海で知った。「驚いてはいけな、これが戦争というものだ」と心に言い聞かせながらもさすがに身震いがした。

事務室で、引き出しに入れていた妻子の写真を日に十数回も出して見ていた先任下士、応召兵でよく義太夫をうなっていたNさん、海兵団同年兵の三人、若かったが男前だったY君、一番シヨックだったのは私と庶務室で机を並べて兄弟のように親しくしていた先輩の久村兵曹は故郷に待つ恋人の写真と手紙を気さくに見せる仲だった。風呂で背中を流し合って子供の頃の思い出話、何するにも一日中一緒だった。あの人もこの人もみんなこの南海の小島に散った。昨日までのあの戦友たちが悉く死んだのだ(私の交代にきたK君も)。十代、二十代、三十代で。人生何の幸せも得ずして。

三十八年にクェゼリン遺族会が結成され、次いで遺族の手によって現地に慰霊碑を建立、度々現地慰霊が叶えられ、また会報も発刊され、遺族の方は支え合い、喜び合っておられる。御霊もようやく安らいだことだろう。私は早速この会とかかわりを持ち、関係知己の遺族を慰問し、以後できる限りのお手伝いをさせてもらっている。生きて還った者の当然の責務と思つて。

私は幸か不幸か曲りなりにも今生きている。人間万事塞翁が馬。この島での肋膜炎が遠因で戦後重症結核を再発、医師から死を宣告され両肺の大手術を三回もやった。大量輸血、血清肝炎、高熱と危篤状態をさまよい、自己共に死と諦め三途の河を渡ったが、何と奇蹟的に快癒した。偏にクェゼリンの戦友たちの加護と信じている。爾来幾十年、ずっと彼たちの供養をつづけている。生ある限り続くだろう。生還者としての贖罪(?)と二百万犠牲者の慰霊、誰かがやらねばの執念である。戦争とは、人間の命とは、人生とは何だろう。

同島は現在、米軍のミサイル基地になつているため部外者の立ち入り不

意とも聞かぬが、できる限り手を尽して霊に伝えてもらいたい。

私はその兄貴分としていた長崎県の久村兵曹の実家に終戦後、天草から直ちに墓参した。今、縁あって久村さんの近くに住むようになり、その後も度々会いに行く。母上と弟さんのひっそりとした家、写真に向つて「久村さん、井上がまた会いにきました」としばし対話する。一方通行だが。母上は息子が生きて帰ったようだと目を濡らされる。許嫁のことに触れられた時は胸が痛かった。「正(ただし)はどのようにして死んだんでしょうか」と、訪ねるたびに口にされる。母として一番知りたいことであろう。覚えてる限りの島での生活の様子、久村さんと過した毎日をこまかく話す。食い入るように聞いてくださる。昭和十九年二月六日、全員玉砕最後の日の詳細は誰も知らない。心苦しいが想像した戦況をお話する。

その母上も先年遂に亡くなられた。私は自分の母が死んだように悲しかった。今は近くの墓地に手を握り合つて眠っておられるだろう。私は毎年、命日には一人墓地に赴き久村さんと対話する。

今や自由と繁栄、人々の生活は安定し日本は平和が続いている。平和という字の何と佳きことよ。しかし今日の礎となった彼等六千五百人のことは忘れない。あの日から早や五十年、紅顔

の美少年も古希を過ぎた老兵と化した
が今平穏な幸せを享受している。悲喜
交錯したクエゼリン島での思い出が走
馬灯のように頭をよぎる毎夜である。
地球上に不当な貪欲を満たさんがた

めの国と国との戦争、そして憎しみ合
う内戦、所詮は破壊と殺りくに他なら
ない。願わくば人類の英知をもって、
不幸な戦争が永久に起らないことを祈
念することしきりである。

「ブラウン環礁の玉砕」を読んで

友友 高 田 源次郎

玉砕戦当時18歳であった私も、近く
68歳になります。振り返り見れば大変
長く、又過ぎた年月は早く感慨一入で
す。ブラウンから救出されて後に、カ
ロリン群島の孤島ナモチック島で負傷
した耳が、最近再発を繰り返してお
り、当時のことが余計に思いだされて
なりません。

矢野雄三様の「ブラウン環礁の玉
砕」を涙しながら拝見しました。良く
ここまでお調べになったと感じ入りま
した。「海軍機搭乗員玉砕寸前に脱出
の」項の内「翌7日も同2機がメリレ
ン島の30名救出に成功」とは私たちの
ことです。前に環礁20号と21号に書き
ましたが少し補足します。

第952海軍航空隊ブラウン派遣隊
で、零式水上偵察機4機を持って(始
めは3機、後で1機増派)陸軍輸送船
の護衛と近海哨戒が任務でした。最初
の空襲でその全機を失い、沈んだ愛機
から潜水して機関銃を外し応戦しまし
たが、効果はなく弾庫は被弾して、残

弾乏しく応戦を中止しました。

玉砕戦を覚悟していた時、エンチャ
ビ島に飛行艇が救出に来ていることを
知り、電信員の必死の努力によって、
ボナベとの連絡に成功。折り返し「本
日、日没後飛行艇派遣、搭乗員他95
2空再建に必要な人員30名乗艇準備さ
れたし」の電報に歓声を上げました
が、困ったことになりました。総勢は
42名。飛行艇は30名までしか乗せない
のが原則です。

自発的に残る主計、看護の2名と指
揮官としての責任上残る整備兵曹長、
電信兵2名。私達飛行兵は口出しも出
来ず、機銃の使用法や物資の埋設場所
の図面を書いたりしました。帰る人、
残る人天地の開きです。

日没後飛行艇2機から物資投下、報
告球(通信筒)で「30名乗艇準備され
たし」しばらくして1機着水、残って
いたゴム艇で5、6名づつ乗艇、残留
指揮官が艇長(中尉)に「30名以上乗
れないのか」と交渉、「駄目だミイラ

採りがミイラになる」「どうしても駄
目か」と必死だ。心情を汲んでか「何
名居るのか」「42名だ」しばらく考え
て「仕方がない乗ってみる爆弾を捨て
る。飛行艇が新しいから上がるだろ
う。防弾板と弾薬を捨てても上がらな
い時は降りてもらおう」。歓喜して全員
乗艇ゴム艇は流した。遙か沖合に出て
エンジン全開数回ジャンプを繰り返した
が離水成功。辛くも救出された搭乗
員と、来援の望みも無のまま放置され
た守備隊将兵たちのこの明暗。生き残
った私には書く資格も言葉もありませ
ん。

トラック基地で「飛行機を呉れブラ
ウンに帰るのだ」「余分の飛行機はな
い」対岸に天山艦攻がズラリと見える
ので、「あれで」と言ったが「水上機
乗りが直ぐ陸上機に乗れるか、馬鹿!
それよりは1日も早く体力回復を計
れ」と諭され戦争の非情さを知った。

エンチャビのその後のことは知りま
せんが、私達のその後を書いてみま
す。(敗戦の激戦地のノモンハン、ガ
ダルカナル、ミッドウエー等の生残り
は、次ぎの激戦地に送られて戦死した
との一部報道もあるので)

搭乗員15名のうち川村兵曹長は2月
17日に負傷して入院後不明。遠岡一益
兵曹長は同日戦死。残った下士官13名
中11名は内地に転勤。一番若く又戦地
勤務の少ない私と、同期の柴田進はそ
のままトラック基地902空に残され

ました。実戦経験者として良く飛び、
又孤島の基地勤務が多く、19年5月ナ
モチック基地で私は両耳を負傷して聾
となりました。

私の替わりに内地に帰った柴田は、
新機空輸中に足を負傷して、台湾の高
雄に入院しました。私は内地帰還後、
搭乗員不適、戦地勤務不適として淋し
い日々を送りました。

11月1日上飛曹に進級したので「進
級さすくらいなら使い道があるのだろ
う、今一度死に場所を下さい」と強硬
に具申して、館山空勤務となりました。
後日上司から、「お前は苦勞してき
たから良いところに行かしてやる」と
故郷の近くの福山基地631空、晴嵐
部隊に転勤になりました。

大型伊400潜水艦に、特殊攻撃機
晴嵐3機を積込み、アメリカ本土又は
パナマ運河を攻撃するのです。これで
最高の死に場所を得たと奮い起ちまし
たが、練成猛訓練中に終戦となり、望
み通りの死に場所は遂に得られません
でした。

昭和51年この生残り飛行兵が中心に
なって、第952海軍航空隊の慰霊祭
を計画して、浮田前会長ご夫妻にもご
出席を得て岡山で開催した時に、ご遺
族、前任者(玉砕以前に他へ転勤して
生残ったもの)、ヤルト島で終戦ま
で頑張った隊員等40数名が集り盛会で
した。直ちに952空会を結成して各
地で慰霊祭を実施しております。この

会で電信員 2 人の生残りが知れましたが、その他の整備兵、主計兵、看護兵のことはわかりません。

その後浮田前会長と共にブラウン環礁遺骨調査団に参加して環礁内に入りましたが、米軍からの上陸許可が出ず僅かに会長を始め 4 名の代表者がエニウエトック島に上陸しました。島を目前にしながら 1 体の遺骨も探せず、涙

呉海軍墓地合同追悼式

に参列して

広島 浦手 ハル

先日は、靖国神社みたままつりの献灯の写真をお送り頂きましてありがとうございます。何時もお心にかけて頂き感謝のほかはありません。

私は、去る九月二十三日、呉海軍墓地で行われた第二十三回合同追悼式に参列させて頂き、大そう感激しましたので、今日はそのことをお知らせします。

この墓地は呉市の長迫公園の中にあつて、合同慰霊碑八七基、個人墓碑一五七基、英国水兵墓碑一基に、殉国の英霊十三万余柱が祀られています。

当日は幸い好天に恵まれ、遺族、戦友、関係者約三千五百名が参列し、厳粛盛大にとり行われました。

始めに海上自衛隊呉音楽隊の国歌奏楽に合わせ昔なつかしいセーラー服姿の奉仕者(戦友)によって国旗と軍艦

しながら持参の菊花、酒、煙草等々を環礁内に投下して慰霊祭をして帰りました。

戦後、傷病恩給申請もありました。先に散った多くの戦友の事もあり辞退しました。善くしたもので医学的にも奇跡と言われる回復をして、日常は大きな不自由はしておりません。

(5 年 4 月 14 日)

旗が掲揚されました。続いて英霊に対して全員が黙禱し、呉本委員長の式辞に続き、呉市長代理、広島県知事代理の丁重な追悼の辞がありました。

次に、戦友宮崎秋雄様が自作の追悼の詩を切々と吟ぜられ、海上自衛隊呉地方総監佐藤海将の献花、儀仗隊敬礼、弔銃発射と、平素はめったに見ら



御拝礼を終えられた高円宮同妃両殿下

れない正式参拝をされました。感激一入でした。

式は、参列者代表の献花と続き、海上自衛隊呉音楽隊の追悼演奏になりました。曲は、同期の桜、海ゆかば、軍艦マーチなど、なつかしいものばかりで在りし日を偲び感無量でした。その頃、上空を飛行機が何回も旋回しました。この慰霊飛行は、第六三四航空隊と第九三四航空隊の関係者の御奉賛と伺いました。参列者全員が献花をして

千鳥ヶ淵 秋季慰霊祭

当奉仕会主催の終戦四十八周年の秋季慰霊祭は、十月十八日(月)爽やかな秋日和に恵まれて、高円宮同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、内閣総理大臣代

から、それぞれの慰霊碑の前で遺族、戦友達が花をあげ亡き人を偲んでおりました。心温まる一日でした。

五十年祭現地慰霊巡拝には、私は足が不自由なのでこの度は参加できなくて残念ですが、同居している長男夫婦が参加させていただきますので宜しくお願い致します。 会長様、奥様、役員の皆様、御身御大切になさいませ。

理、参議院議長及び厚生大臣、環境庁長官各代理、日本遺族会会長、英霊にこたえる会会長、自民、公明、民社、新生、日本新、さきがけ各政党代表を始め、都道府県知事代理、遺族会、戦友会代表、各協賛団体代表、自衛隊の代表部隊、更に高校生等千数百名が参列し、盛大に挙行された。

この日、墓前には高円宮同妃両殿下御下賜の大きな花籠を中心に細川内閣総理大臣、最高裁長官、衆参両院議長、各省庁大臣・長官、都道府県知事、協賛団体等から供えられた馥郁たる香りの菊の生花と、美事な盆栽が飾られていた。

午後一時やや前、海上自衛隊東京音楽隊の奏楽のうちに、両殿下が御臨場

(13 頁 4 段につづく)

靖国神社秋季例大祭盛大に斎行

(靖国神社報「靖国」四六一号より転載)

参道の樹々が美しく色づきはじめ、大輪の菊花も色とりどりに咲き薫る神苑。去る十月十七日から十九日までの三日間に亘り秋季例大祭は盛大且つ厳肅に執り行われた。また十八日の当日祭には勅使が参向、天皇陛下からの御幣物が捧げられ、十八日・十九日の両日には皇族方も御参拝遊ばされた。

靈璽奉安祭執行

秋季例大祭にあたり、宮司以下全神職は十六日夕刻から齋戒、参籠に入り、翌十七日午後三時拜殿南側前庭に於て「清祓ノ儀」を執行。引き続き御本殿に進み、例大祭のつがなき奉仕を祈る「本殿ノ儀」を執行した。



同日夜午後七時、境内の灯を一切消した浄闇の中「第一百十八回靈璽奉安祭」が厳肅に執り行われ、新たに十六柱の神霊が御本殿正床に奉遷、お祀りされた。

勅使岩波輝俊掌典参向

秋晴れの翌十八日「当日祭」は、橋本龍太郎日本遺族会会長、井本臺吉英霊にこたえる会会長、古屋哲男靖国神社奉賛会会長代理、森田康之助・井上慶次郎・古賀誠各崇敬者総代、松平永芳前宮司をはじめ各界の代表、約五百六十名参列のもと、午前十時、大野宮司以下奉仕員齋館から御本殿に参進。國學院大学吹奏楽部が「國の鎮」を奏する中、御内陣の御扉が開かれ、神饌五十台が供えられた。

次いで、大野宮司御神前に進み、昨夜新たに神霊をお迎えしたことを奉告すると共に英霊の安鎮と世界の平和を祈念する祝詞を奏上した。

十時三十分、参列者謹んでお迎え申

し上げる中、勅使岩波輝俊掌典本殿に参進。御幣物を奉献し、大御心のままに御祭文を奏せられた。

勅使退下後、國學院大學フォイルコール混声合唱団による「鎮魂頌」の献楽の後、特別参列者が玉串を奉りて拝礼。その後、宮司は拜殿に降り参列者に対し御挨拶を申し上げた。

翌十九日「第二日祭」は、羽倉信也・三輪良雄両崇敬者総代をはじめ、全国から参集した御遺族・戦友・崇敬者など三百五十名余が参列して執行された。また午後六時には、祭典の無事終了したことを奉告する「直会ノ儀」を執行し、三日間に亘る盛儀は滞りなく終了した。

皇族方も次いで御参拝

また此度の例大祭期間中、十八日午後一時三十分には常陸宮同妃両殿下、十九日午後一時三十分には三笠宮同妃両殿下、高円宮同妃両殿下が御昇殿、玉串を捧げられて御参拝になられた後、拜殿にて奉迎の御遺族・崇敬者に親しくお言葉をかけられた。

国會議員団参拝

十八日午後「みんなで靖国神社に参拝する国會議員の会」の衆参両院議員百三十二名(代理を含む)が、また十九日午前「みんなで靖国神社に参拝する新生党国會議員の会」の衆参両院議員四十八名(代理を含む)がそれぞれ昇殿参拝を行った。

(12頁より)
開会の辞のあと参列者一同、国歌

「君が代」斉唱、次いで海老原宗陽先生が墓前に進み、献茶の儀をすまされた。

続いて瀬島奉仕会会長が式辞をのべられたが、参列者は戦死者に感謝しその慰霊顕彰に努めることの大事さを改めて心に刻んで傾聴していた。

このあと橋本清祥先生が昭和天皇御製を朗々と吟詠して式場の雰囲気は浄め、引き続き神社音楽協会の皆さんによる浦安の舞が奉納され、御霊もその優雅な舞を御嘉納のことと思われた。

内閣総理大臣の追悼の辞は鳩山内閣官房副長官が代読され、国民を代表しての心のこもった言葉が捧げられた。

やがて参列者一同起立するなか、両殿下には席を立たれて、墓前にお進みになり御礼拝、続いて黙禱を捧げられた。参列者は御一緒に深く拝礼し戦死者の御霊の御平安を祈ったが、式場肅として静寂となるなか、戦中、戦後の様々な思いが去来した。

御拝礼を終えられて、両殿下は遺族席の人々に温い御会釈を賜わりながら御退場なされたが、戦死者に対する皇室の有難い御配慮が痛感された。

このあと、陸海空各自衛隊の代表部隊の参拝、陸空各自衛隊音楽隊の慰霊献奏が行われた。

夏の夜の祭典 靖国神社の 「みたままつり」 盛大に 執行

―連日若年参詣者で賑わう―

東京の夜空を美しくいろどり、「夏の風物詩」として多くの人々に親まれている靖国神社の「みたままつり」が七月十三日から十六日までの四日間盛大に行われた。

丁度この時期は盂蘭盆で、各家庭ではお墓参りや迎え火を焚くなど祖先の「みたま」を偲び敬うが、靖国神社でもこの期間に戦歿者二百四十六万余柱

靖国神社の みたままつり献灯について

靖国神社では、毎年七月十三日から十七日までの「みたままつり」に御祭神奉慰のための献灯を受付けています。御初穂料は、大型一灯一万円(写真参照) 小型一灯二千円です。

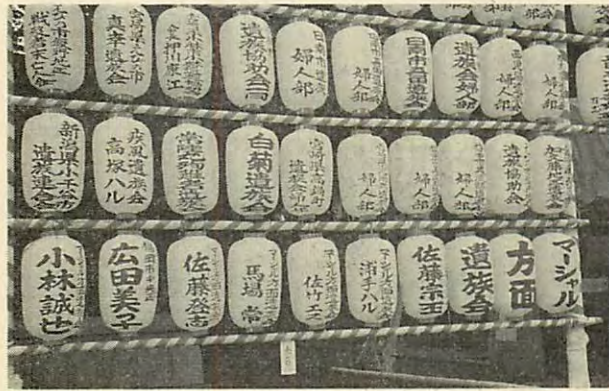
締切りは六月二十日です。くわしくは靖国神社宣徳課献灯係又は、当会にお問い合わせ下さい。

なお、この献灯行事が続く限り毎年掲揚して頂ける制度もあります。この場合は大型一灯十万円、小型一灯三万円となっています。

の「みたま」をお慰めするため、昭和二十二年から斎行し、今年で四十七回目。本年は、十三日、十五日の夕刻雷雨にみまわれ梅雨の影響はあったものの日中はまずまずの天候で、境内は連日連夜多数の参拝者で賑わった。

厳肅に祭典奉仕

祭典は毎日午後六時から御本殿に於て執行。御遺族・戦友・崇敬者等多数拝殿に参列する中、大野宮司以下祭員御本殿に参進。国学院大学吹奏学部が奏楽「山の幸」を奏する中を、神饌が次々に供えられ、斎主大野宮司が神霊の御冥福と国家の安泰を祈念する祝詞を



奏上。次いで中庭に於て同吹奏楽部による献楽「靖国神社の歌」が奏せられた後、参列者は昇殿参拝を行い、祭典は四日間とも厳肅に斎行された。

夜空を彩る「みあかし」

期間中境内には、各県遺族会・靖国講・戦友会から奉納の大型提灯や御遺族・戦友・崇敬者の方々の小型提灯あわせて二万二千灯余の献灯が掲揚され、境内参道両側には、各界有名人揮毫による書・画を仕立てた懸雪洞約五百灯や全国著名俳人の特別献句及び入選句百五十句を墨書した大型懸雪洞が掲げられた。(社報「靖国」より転載)

環礎「ミレー抄」(18)

会友 成宮芳三郎
(66警備隊軍医長)

いつも果つる身とも知らずて肌着のみ常に清らに保つ幸ありき
椰子の木に高くかかりて雨流る兵のかぶりし鉄かぶと一つ
名を知らぬ草をも食みし生にして若草もえたつ野辺に出でたつ
水ひきし爆撃あとの環礎はただ穏やかに波光り居り
み便りに胸あたたむと書きてありひそかに妻の便り開けば

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

- | | | | |
|------|-------|--|-------|
| 北海道 | 伊藤 フジ | 佐賀県 | 松永タツ子 |
| 山形県 | 丹野 アサ | 長崎県 | 安達シヅヨ |
| 福島県 | 三浦 一郎 | 熊本県 | 片山 玲子 |
| 千葉県 | 長沢 その | 宮崎県 | 池田 トミ |
| 東京都 | 鈴木梅太郎 | 鹿児島県 | 丸田 キワ |
| 神奈川県 | 桃谷 友孝 | 会友・篤志会員等 | 井上 義夫 |
| 富山県 | 服部 純昌 | 江村 源次 | 福田 呉子 |
| 静岡県 | 藤木 ハナ | 以上は平成五年六月一日より十一月三十日まで、寄付された方々二十三名で、その合計金額は十一万三千元でした。 | |
| 鳥取県 | 市川 市郎 | | |
| 福岡県 | 井上 照美 | | |
| 福岡県 | 一瀬クモエ | | |

島の名 昔と今

南洋の島々は、十六世紀の初めに、スペインやポルトガルなどの探検家たちによって発見され、西欧諸国が領有した。マリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル群島の所謂内南洋は、ドイツが領有していたが第一次大戦後日本委任統治領となり、第二次大戦後は、アメリカを施政権者とする国連信託統治領となった。

第二次大戦後新しい国の誕生などもあって、島の名の変った所がある。本会は、馴染みの深い旧名を使っている。

るが近頃は旧名では通用しない所もあり、全く別の島(例、マキン)のこともあるので御注意下さい。

「環礁座談会」の予告

四月十七日(日)に、ウオッセ、マロエラップ両島関係会員、会友の座談会を予定しております。参加を希望される方は、同封した私製はがきの余白(欄外でも可)にその旨を御記入下さい。座談会の日時、会場が決定次第(二月末頃)申込みのあった方のみお知らせします。

旧	新
カロリン諸島	
ウルシ	ユリティ (Ulthi)
トラク	チューク (Truk)
ポナベ	ポーンペイ (Pohnpei)
クサイ	コスラエ (Kosrae)
マーシャル群島	
マーシャル諸島	
ブラウ	エニウェトク (Eniwetok)
クゼリン	クワジェリン (Kwajalein)
ルオット	ロイ-ナムル (Roi-Namur)
ニムル	
エビゼ	エバイ (Ebeye)
ヤルト	ジャルト (Jaluit)
メジュロ	マジュロ (Majuro)
ウオッチェ	ウオッジエ (Wotje)
ミレ	ミリ (Mili)
ギルバート諸島	
ビッグマキン	ブタリタリ (Butaritari)
リトルマキン	マキン (Makin)

名簿訂正

◎ 平成3年8月15日発行の会員名簿を
(5) 次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏名>	<訂正事項>
23	小杉リサ	死亡のため妹サヨが継承(同居所)
24	相馬ツキ	〒981-32 仙台市泉区寺岡2-7-17 TEL 022-378-3848 に変更
27	稲葉和雄	〒300-45 茨城県真壁郡明野町大字赤浜2 TEL 0296-52-0065 戦没者堤清、続柄弟、所属部隊61警、戦没年月日19.2.5 戦没地クェゼリン<新入会>
27	武井みよ子	〒300-45 茨城県真壁郡明野町押尾558 TEL 0296-52-0386 戦没者堤清、続柄妹、所属部隊61警、戦没年月日19.2.5 戦没地クェゼリン<新入会>
35	井口ケイ子	〒120 東京都足立区谷中1-33-17 TEL 03-3606-3758 戦没者大島達巳、続柄妹、所属部隊4 施、戦没年月日19.2.6 戦没地クェゼリン<新入会>
40	谷井自助	死亡のため退会
44	露木千鶴	住所奈野市南矢名2-20-7 に表示変更
44	服部純昌	〒238 横須賀市上町4-9 TEL 0468-22-5880 戦没者服部久四郎、続柄長男、所属部隊八海山丸、戦没年月日17.10.22 戦没地ギルバート<新入会>
52	坂下綾子	〒506-11 岐阜県吉城郡神岡町宝町 TEL 0578-2-4858 戦没者上森馨、続柄妹、所属部隊3134、戦没年月日19.2.24 戦没地ブラウン<新入会>
60	木村久子	〒920-11 金沢市田上新町262 へ転居
61	植田敏祐	氏名植田敏裕に訂正
69	大石明	〒850 長崎市巾着町1-9-5 TEL 0958-26-0456 戦没者大石平次、続柄弟、所属部隊ウ90-ウ50 戦没年月日19.2.6 戦没地クェゼリン<新入会>
69	松永タツ子	〒840-21 佐賀県佐賀郡諸富町大字徳富516 TEL 0952-47-5019 戦没者松永春雄、続柄妹、所属部隊6 通、戦没年月日19.2.6、戦没地クェゼリン<新入会>
78	成宮芳三郎	住所〒214 川崎市多摩区南生田1-10-18 TEL 044-955-8880 に変更
78	山口正雄	〒242 大和市西鶴間6-17-12 TEL 0462-75-6404 備考ナウル警備隊<新入会>

靖国神社を崇敬しお護りする
奉賛会に入会しましょう

護国の英霊の鎮ります靖国神社
の末長き御安泰のために、御祭神
に最も身近かな私どもは全員が
奉賛会に入会しましょう。

59号で、右のようにお呼びかけ致し
ましたところ、早速全国から続々と入
会の申込みがあり、8月1日から11月
30日までに80名(内終身会員19名)に
達した由、奉賛会から感謝の言葉が寄
せられました。御協賛下さった皆様に
厚く御礼申しあげます。

入会の手続きなどは、奉賛会又は本
会にお問い合せ下さい。

〃五十年を顧みて〃 に御寄稿を

今年8月発行の「環礁50年記念号」
の「五十年を顧みて」の特集に御寄稿
をお待ちしております。

1行17字(句読点も1字)で60行か
ら90行位を目安にお書き下さい。

戦地からのお便りなどをお持ちの方
はコピーして頂けましたら幸せです。

尚、勝手ながら採否は広報委員に御一
任下さい。返却を要するお便り、写真
などは簡易書留として下さい。

締切りを4月30日とします。

既にお出しになった方で原稿をさし
替へたい方は4月末日迄に新原稿をお
送り下さい。

本部だより

☆昨年は全国民が待ち望んでいた皇太
子殿下の御成婚という世紀の御慶事が
ありました。「御民吾れ生ける願しあ
り」と詠じた先人の感激が偲ばれたこ
とでした。

☆今年には、クエゼリン、ルオット、ブ
ラウンの玉碎から五十年になりますの
で、三月二十七日に五十年祭を厳粛か
つ盛大に執り行います。お身内お揃い
で賑々しくおいで下さい。

☆五十年祭現地慰霊巡拝は、ヘーゼル
司令官の御厚意によってクエゼリン環
礁内に宿泊できることになりました。

員数に限りがありますので早目にお申
込み下さい。

☆異動

会友山口正雄さんに、広報委員と五
十年祭委員を委嘱しました。

五十年祭委員近藤マヌエさんが健康
上の理由で辞任し、小室洋子さんと交
替しました。

☆お便りをお寄せ下さい

この「環礁」は同じ境遇の仲間たち心
のふれ合いの場としてお気軽に御利
用下さい。身のまわりのこと、趣味や
レクリエーションのこと、この会に対
する率直な注文など何なりとお寄せ下

謹 賀 新 年

平成 六 年 元 旦

◎本会役員及び篤志会員

顧問	栗林徳五郎	篤志会員	田代章一
相談役	大給湛子	同	土屋太郎
会長	佐藤宗丕	同	徳原徳子
常任幹事	佐竹エス	同	並木進
同	昼間栄平	同	長谷川栄次
幹事	荒木常子	同	長谷川敏
同	石谷典夫	同	浜松恒雄
同	内海淑子	同	本坪和昭
同	黒川誠	同	松平永芳
同	高林芳夫	同	村瀬松雄
同	山口良二	同	森山喜久雄
監事	栗原利雄	同	山村要
同	高橋鎮夫	同	横溝幸四郎
篤志会員	石井清	同	

さい。原稿は原則としてお返ししてお
りませんので、返却を要するものはそ
の旨を書き添えて下さい。採否と多少
の手直しはあらかじめ御了承下さい。

☆入会のおすすめ

本会は、会費を納めた者だけを会員
として登録し二月と八月に会報「環
礁」をお届けしております。

この会のあることを知らない方が沢
山居ります。お知り合いに本会をPR
して下さい。マーシャル諸島とギルバ
ート諸島方面の戦没者の親族ならば誰

でも御入会頂けます。同方面に勤務さ
れた戦友の皆様には会友として御入会
頂いております。会員、会友とも年会
費は二千元で入会金は要りません。

本 部

〒103 東京都中央区日本橋人形町

一八一二(泉商事ビル)

マーシャル方面遺族会

電話〇三―三六六一―八七六〇
FAX〇三―三六六一―六二四一